

Title	希望に関する文献的研究 : 高齢者を中心に
Author(s)	大橋, 明
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 5 P.11-P.20
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8051">https://doi.org/10.18910/8051</a>
DOI	10.18910/8051
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 希望に関する文献的研究—高齢者を中心に—

大橋 明

## はじめに

1995年1月に発生した阪神淡路大震災は何万人もの被災者を生み出し、孤独死、自殺者が多く出現した。またバブル経済が破綻し、多くの経営者が自ら命を絶った。そして、日本では高齢者の自殺率が世界でもトップクラスにある。しかしその一方で、先天性の病気のために生まれつき手足がない若者が、明るく大学へ通い、マス・メディアにも登場している。

第二次世界大戦中にドイツ軍によってアウシュヴィッツ強制収容所へ送り込まれた Frankl (1947/1961) は、いつガス室へ送られるかわからないという極限状況において、仲間の囚人がある日時に解放されるという希望を持ち、その期限に解放される見込みが全くなかったとき、病に倒れ死んでいったことを記している。「未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであった」(Frankl, 1947/1961, pp. 179) という言葉が示すように、未来への希望が失われることは人を死へも至らしめる可能性をもっていると言える。

従って、希望は誰もが持ち得るものであり、人が生きていく上で必要不可欠なものである (e.g., Fromm, 1968/1970; Lynch, 1965; Stotland, 1969; 北村, 1983; 勝俣, 1990) が、先述した震災被災者や経営者、高齢者は、多くの喪失によって未来への信頼を失い、また新たな希望を見出すことができなかつたと考えられる。それゆえ、個人が生き生きとした生活を送るよう援助するためには、希望がどのように生じ、どのように失われるのかという問題が今後重要視されなければならない。本論では、はじめに希望の定義と測定方法について概観し、高齢者を対象とした従来の研究から、希望を促進・維持あるいは減弱させる要因について検討する。

## 希望の概念

希望 (hope) という言葉は、古くはギリシア神話の「パンドラの壺 (箱)」に見ることができる。しかしこのパンドラの壺に唯一残った希望が意味するところについて、ギリシア神話では述べられてはいない。

### 1. 希望の定義

#### (1) 希望を目標への期待として捉えて定義したもの

Lewin (1942a/1997) は、希望を心理的未来 (psychological future) のひとつとして位置づけている。Lewin (1942b/1997) によると、希望とは「そのうち、今の事態が変わって自分の望み通りになるだろう」ということを意味し、また個人の「期待水準 (level of expectation)」と「願望の非現実的水準 (irreality level of wishes)」とが類似していることを意味する (pp. 80)。加えて、心理的未来は希望と絶望との間をしばしば揺れるとい

う。このように、Lewinは希望を説明するために期待という概念を用いている。

その一方でLewin (1942a/1997) は、「幼児は事実と願望、希望と期待とははっきり区別することをしない。願望に満ちた思考をすることは成人でも普通のことであるが、年長者は白昼夢的な願望と現実との区別がよくできると言われている」(pp. 223) と述べている。このことから、Lewinが希望と期待とは区別し得ることを指摘しているとも考えられ、Lewinが希望と期待とをいかに関連づけようとしたのか明確ではない。

次にFarber (1968/1977) は、希望が自殺に密接かつ強力に関係すると指摘し、希望は「もっとも快活な楽観主義から、もっとも暗い絶望に至るまで」と広範囲であり、「ある望まれた結果が起こるであろうという自信に満ちた期待を伴うもの」(pp. 11) であるとしている。人間は未来を指向することからも、Farberは希望の対象や希望の強さの水準が人の行動の中核的な決定因であると考えられる。

この希望について、Farberはパーソナリティと状況の交互作用の結果であると位置づけしており、パーソナリティとは有能感 (the sense of competence) であり、状況とは愛する人の喪失、失恋、財産や地位、病気など「最小限に自分を受容して生き続けることをおびやかすような脅威の程度」(pp. 14) であるとしている。

実験心理学と臨床心理学の双方の側面から希望の概念について検討したのはStotland (1969) である。Stotlandは、辞書により希望の意味を検討し、希望がもつ意味の本質について期待の概念と統合可能であり、「目標に到達するというゼロ以上の期待(expectation)」(pp. 2) としている。

Stotlandは、ある目標に到達する生活体の動機づけが、ある程度、目標到達について知覚された確率とその目標に関して知覚された重要性との正の関数であり、目標に到達する確率と重要性が大きいと知覚するほど、生活体が経験するポジティブな感情も大きくなることを論じた。加えて、目標に到達する確率が低いと知覚し、かつ目標の重要性が大きいほど、生活体の経験する不安は大きくなることを指摘した。すなわち、Stotlandは希望を論じる上で、目標に到達する「確率」と到達しようとする目標の「重要性」に焦点を当てていると考えられる。

Snyderら (e.g., Snyder, Harris, Anderson, Holleran, Irving, Sigmon, Yoshinobu, Gibb, Langelle & Harney, 1991; Snyder, Sympson, Ybasco, Borders, Babyak & Higgins, 1996) は、希望を目標到達への期待と同義として扱う文献をレビューし、それまでの希望の定義が目標に到達できるという一次元の構成概念であることを指摘した上で、希望をagencyとpathwaysについて相互に得られた感覚で構成される認知的なまとまりと定義した (Snyder et al., 1991)。agencyとは、目標到達に必要な活動を始めたり維持したりする信念であり、一方pathwaysとは、目標に到達するための道筋を生み出すことができるという信念を示す (Snyder et al., 1996)。すなわち、Snyderらは、希望が目標に向かっていく意志の強さと目標に到達する可能性に関する認知の相互作用で決定すると考察していると考えられる。

## (2) 希望と目標到達への期待とを区別して定義したもの

Lersch (1970) は、希望を人生の価値や意義あるいは意味の実現される視界または境界としての未来に向けられた動的な感情で未来愛と言うべきものとした。希望と期待は未来

を志向するものであるが、希望が目標となるものが明確なものとして設定されていないのに対して、期待でははっきりしているという。希望は挫折しない盛んな生の衝動をもつ人にとっては呼吸のようなものであり、全ての行動を貫く導線であると指摘し、また生の衝動が強いほどその人の希望の感情は生き生きと働き、それだけ多くの未来をもつとしている。

Maisonneuve (1948/1955) は、希望について「未来を志向する。それは期待でもある」が、「それだけでは希望を定義するにはとうてい充分ではない」ために「期待の他の形の間に希望を性格づける」ことが必要であるとした (pp. 133)。Maisonneuveによると、希望は忍耐であり、希望する対象の共有ばかりでなく様相さえも想像することを拒むものであり、運命の意志に任せた態度 (Maisonneuveによると、この態度は信頼の一形式とする) であり、忍耐や謙虚さをもつことである。加えて、希望は、「是非とも幸福」になろうとし、極限においては自己中心性の不全型を示し、自足しようとする執拗な意志とは関わりがないとした。このような考察の上、希望を「信頼的で貪欲性のない期待」と定義している。このように、希望が期待と関連づけて定義されているが、特定の対象をもたないという点で、前述したLewin等の目標到達への期待とは異なると考えられる。

北村 (1983) は、希望に関する諸家の説と辞書による定義を検討し、希望を特定の目的や目標の達成にかかわる願望や期待の場合と区別すべきことを指摘した。そして希望を「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情。特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目指すものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境界としての未来が信頼できるという明るい感情」とした。

さらに北村は、未来において到達しようとするものに至るまでに何が起こるかわからないゆえに、「未来における実現・獲得・到達を求める」欲求や意志、「手を伸ばしただけでとらえられ、一歩踏み出しただけで到達できるものに対する」願望、「数時間・数日・何年後かの実現」を目指す意欲は、未来を信頼する感情である希望が存在しない限り、達成のための努力はほとんど期待できないものとして捉え、希望を未来への展望における基礎とした。

### (3) その他の定義

Fromm (1968/1970) は、希望を「まだ生まれていないものためにいつでも準備ができてきているということ」であり、「たとえ一生のうちに何も生まれなかったとしても、絶望的にならないということ」としている。希望をもつということは、「ひとつの存在の状態」であり、「心の準備」であり、「はりつめてはいるがまだ行動に現れていない能動性を備えた準備」と捉えている。希望が失われた場合、生命は終わりを告げることとなり、希望が生命の構造と人間精神力学の本質的要素であるとしている。

次にMiller & Powers (1988) は、希望を「他者との関係」「個人の有能感」「対処能力」「心理的な幸福感」「人生の目的や意味」「“できる”という感覚」に基づいたよい未来の予測としている。

また勝俣 (1992) は、希望を「将来ないし未来において、望ましい何かの実現ないし達成されることについてこいねがい、望むことであって、期望 (期待して望むこと)、祈望 (祈り願うこと)、企望 (くわだてのぞむこと)、冀望 (こいねがい、記すこと) を包含する

ものである」としている。これは漢字文化圏内における「希望」の概念の多様性を指摘している（勝俣，1992）もので、希望について期待を含めて包括的に定義していると言える。

## 2. 希望の要素・特質

従来、希望にはどのような要素や特質があると考察されてきたのだろうか。

まず、未来に向けられたものとしては、次の秒、週、あるいは遠く離れた未来に向けられたもの（Stephenson, 1991; Godfrey, 1987; Moltman, 1967）、未来に対するポジティブな感情（Stoner & Keampfer, 1985; Lange, 1978; Macquarrie, 1978）、目標到達への期待（Stotland, 1969; Lynch, 1965; Erickson et al., 1975）が挙げられる。

一方、不屈の精神（Fromm, 1968/1970）、試練あるいは囚われ（Marcel, 1962）などに関連づけて捉えられたり、ある種の活動を含んだポジティブな感情（Farran et al., 1992; Fromm, 1974）、自己や他者を含むもの（Herth, 1993; Nowotny, 1989）、世話、分かち合い、信用、無条件の愛、憧れや必要とされる感覚（Lynch, 1965; Marcel, 1962）、できるという感覚（Lynch, 1965）、超越（Lynch, 1965）、自由（Miller & Powers, 1988）、信頼（Dufault & Martocchio, 1985）、絶望のアパシーと闘う活力（Lange, 1978; Menninger & Pruyser, 1963）といった性質をもつものとして考えられたりしてきた。

希望とは時間的には「未来」に向けられたものであるが、その背景には様々な感覚を伴うものであることが推察される。

## 3. 希望を測定する方法

希望を測定する尺度は、Beck, Weissman, Lester & Trexler (1974) が悲観主義の測定という名目で作成したThe Hopelessness Scaleから始まり、さまざまな考察のもとに作成されてきた。

Erickson, Post & Paige (1975) は、Stotland (1969) による希望の定義を基礎として、望ましい目標への到達に関する知覚された重要性と知覚された確率を測定するための尺度を開発した。The Hope Scaleと命名されたこの尺度は、日常生活では一般的な目標に関する質問20項目で構成されており、各項目について、その重要性と起こり得る可能性について回答を求めるものである。

しかし、これらの尺度はStotland (1969) の「目標到達に関する期待」という希望の狭い概念に基づくものであり、希望の複雑な構造を反映するものではないという指摘がある（Herth, 1991）。そこで、希望の多次元性を加味した尺度が作成され始めた。その先鞭を執ったのがObayuwana, Collings, Carter, Rao, Mathura & Wilson (1982) のHope Index Scaleである。

続いて作成されたのがMiller Hope Scale (Miller & Powers, 1988) とNowotny Hope Scale (Nowotny, 1989) である。Miller Hope Scaleは、希望が「他者との関係」「個人の有能感」「対処能力」「心理的な幸福感」「人生の目的や意味」「“できる”という感覚」から生じる未来への予測であるという視点から作成された40項目の尺度である。また29項目から構成されるNowotny Hope Scaleは、従来の研究から導かれた希望の側面、すなわち、「希望とは未来に向けられたもの」「積極的な関わりを持つもの」「内面から生じるもの」「希望されたことは起こり得ること」「他者や超越者との関わりがあること」「希望の結果は

個人にとって重要であること」について測定可能である。

一方、Miller Hope ScaleとNowotny Hope Scaleは、漠然とした希望や時間の方向性のない希望を排除してしまっているという指摘もある (Hinds & Martin, 1988; Herth, 1991)。この問題を克服するために作成された尺度がHerth Hope Scale (Herth, 1991) である。

30項目から構成されるこの尺度は、希望に行動的次元 (希望に到達するための行動)、認知的次元 (希望に関連して生ずる認知)、感情的次元 (希望を持つ過程において得られる感覚や情動)、親和的次元 (希望をもたらす関係性)、時間的次元 (希望を持つ人の、過去・現在・未来の体験)、文脈的次元 (希望を持つ人の状況) という6次元があるという Dufault & Martocchio (1985) の考察に基づき作成された。さらにこの Herth Hope Scale を臨床場面での利用のために簡便化したものが、12項目からなるHerth Hope Index (Herth, 1992) である。

他方では、希望を目標達成への期待と定義したStotlandの理論に沿いつつも、独自の展開を図っているSnyderらがSnyder Hope Scale (Snyder et al., 1991) やState Hope Scale (Snyder et al., 1996) を作成している。Snyder Hope Scaleの方は、状況や時間に関わりなく比較的安定した特性としての希望を測定するものである一方、State Hope Scaleは、それまでの尺度では測定されていない一時的な希望、すなわちある時点における目標指向の様相を測定するものである。

## 希望に関する従来の研究

### 成人、患者など

様々な対象での研究がなされているが、ソーシャルサポート (Foote, Piazza, Holcombe, Paul & Daffin, 1990)、信仰の強い人 (Herth, 1989)、自尊感情の高い人 (Foote et al., 1990)、有能感の高い人 (Onwuegbuize & Daley, 1999) は希望水準も高く、一方では自殺念慮の高い人は希望水準が低く (Lester, 1998; Range & Penson, 1994)、精神病理・不適応と関連している (Cramer & Dyrkacz, 1998) ことが示されている。しかしMiller (1989) によると、Raleigh (1980) は、統制の位置、ソーシャルサポート、宗教的信念などと希望との間に有意な関係を見出せなかったことを報告している。

### 高齢者

#### 1. 高齢者の希望を生じさせる体験はなにか

希望がどのような具体的体験や出来事に随伴して生じるかについて研究が行われている。Gaskins & Forté (1995) は65～95歳の高齢者12名を対象にカメラを渡し、希望を与えてくれる事物を撮影するよう求め、その現像写真をもとに面接を行った。その内容を分析したところ、高齢者の希望が、信仰、他者との交流、健康の維持、積極的な感情 (positive emotions) をもつこと、未来への期待、平等・公正、資源の利用、回想・特別な記憶・希望をかきたてる事物、特別な場所にいること、他者に奉仕することから生じていると指摘している。小泉・足高・大黒 (1997, 1998) も同様の手法を用いたところ、他者との交流、健康、趣味、他者への奉仕、過去の体験・思い出、仕事・役割、自然、信仰、経済的保障、

子供たちの成長、積極的感情・生き方が希望をもたらすとしており、Gaskinsらの結果と類似する報告をしている。

## 2. 高齢者の目指すものとしての希望はなにか

Dufault & Martocchio (1985) は、高齢のがん患者35名を対象に行われた2年間に及ぶ面接と観察から、現在存在するものが改良され得る、望ましい環境となる、好ましくないことが起こらないだろうなど、ある望ましい状況になり得るという希望（個別的希望）と、未来の有用であるが漠然とした発達の感覚である希望（総合的希望）とに分類している。

Herth (1993) は、自宅に居住し、健康であり、障害の少ない前期高齢者（ヤング・オールド：young-old）は旅行などの余暇活動やこの1～3年の近未来での健康に関する自己に関連させて希望を記述したのに対し、80歳以上になると、自己ではなく子どもや孫、配偶者、友人を愛することに関連させた希望を記述する傾向にあることを指摘した。加えて年齢に関わりなく、長期療養施設に居住し、健康状態が悪く、身体的機能に大きな障害を持つ高齢者は、友人や介護者に関する希望の記述や、来世での生活に焦点を当てた希望を記述したことを報告している。

## 3. 高齢者の希望に影響する要因はなにか

Farran & McCann (1989) は、地域社会に居住する126名の高齢者を対象に、ストレスフルなライフイベント、ソーシャルサポート、個人的統制（personal control）、信心深さ、健康などとHopelessness Scale (Beck et al., 1974) との関連性を検討した結果、精神的健康、信心深さ及びソーシャルサポートが希望の予測変数であることを報告している。

Herth (1993) は、地域社会に居住する高齢者と長期療養施設に居住する高齢者の60名に年齢、性別、人種、配偶者の有無、教育水準、収入、身体的機能の能力、活力水準、健康状態とHerth Hope Scaleによる希望水準との関連性を検討した。その結果、居住地と活力水準で希望の水準に差異が見られ、長期療養施設に居住し、疲労の濃い対象者は希望水準が低いことが示された。

療養施設で慢性疾患をもつ58～100歳を対象として研究を行ったBeckerman & Northrop (1996) は、Miller Hope Scaleを構成する一部の項目と外部からのサポートの知覚には相関があることを見出し、サポート資源の存在が、高齢者の希望や疾病への対処に影響することを示唆している。

Zorn (1997) は64～94歳の居宅高齢者を対象に、ソーシャルサポート、年齢、性別、社会経済的地位、健康、宗教的な幸福感（religious well-being）を説明変数、Miller Hope Scaleを従属変数として重回帰分析を行った。その結果、ソーシャルサポート、宗教的な幸福感及び健康が希望の予測変数であることが示された。

高齢のがん患者100名を対象としたFehring, Miller & Shaw (1997) によると、友人に会うためではなく宗教的な信心を深めるために教会へ赴くなどの本来の信心深さ（intrinsic religiosity）を持つ患者や実存的幸福感（spiritual well-being）を強く持つ患者は、高い希望やポジティブな気分状態にあるという。

Herth (1990) は、この12～18か月の間に寡婦（寡夫）となった75名の高齢者を対象に

Herth Hope Scale、対処行動、多重喪失及び医療施設と悲嘆の解決 (grief resolution) との関連性を検討した。その結果、効果的な悲嘆の解決は、高い希望、多重喪失がほとんどないこと、直面的・楽観的などの各対処スタイル、ホスピスでの配偶者の死と関連していた。更に重回帰分析を行った結果、悲嘆解決に効果的な要因は希望と医療施設の形態であることが示された。

以上の結果からも、希望は様々な体験から覚知され、また個人の認知の仕方、ソーシャルサポートや居住・治療施設などの形態によって変化することが窺われる。希望を生じさせる体験や目標に関する結果では、他者との関係性が共通して認められた。また、個人や環境の変数の希望に与える影響に関する報告では、ソーシャルサポートが共通の要因として指摘されている。すなわち、自己と他者（個体・神仏）との関わりが高齢者の希望において無視できない影響要因であろう。

### 終わりに

高齢者は過去を回想し、未来は考えないというのが一般的に認識されているが、高齢者も将来の計画や希望をもつことは、適応との関連において重要であることが報告されており (Lehr, 1967; Kastenbaum, 1987)、また高齢者よりも青年期の方が回想の量が多く、回想が多い高齢者は死の不安が高いという結果から、高齢者の回想は現在における不適応の状態への対処であるとする研究 (長田・長田, 1994) もある。つまり、高齢者は過去を回想することが多い・回想していることが高齢者の適応状態を示すという考えは不適当であり、希望のあることが重要であることも指摘されている。

近年、中高年の自殺や抑うつ、高齢者の生きがいの問題等がクローズアップされてきているが、それらの問題と希望とは密接に関わる (勝俣, 1990)。とは言え、まだ高齢者を対象とした希望の研究は僅かであり、更なる研究の積み重ねが必要であろう。

### 引用文献

- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.
- Beckerman, A., & Northrop, C. 1996 Hope, chronic illness and the elderly. *Journal of Gerontological Nursing*, 22 (5), 19-25.
- Cramer, K. M., & Dyrkacz, L. 1998 Differential prediction of maladjustment scores with the Snyder hope subscales. *Psychological Report*, 83, 1035-1041.
- Dufault, K., & Martocchio, B.C. 1985 Hope: Its spheres and dimensions. *Nursing Clinics of North America*, 20, 379-391.
- Erickson, R.C., Post, R.D., & Paige, A.B. 1975 Hope as a psychiatric variable. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 324-330.
- Farber, M. L. 1968 *Theory of suicide*. Funk & Wagnalls, New York. (大原健士郎・勝俣暎史 (訳) 1977 自殺の理論—精神的打撃と自殺行動— 岩崎学術出版社)
- Farran, C.J., & McCann, J. 1989 Longitudinal analysis of hope in community-based older adults. *Archives of Psychiatric Nursing*, 3, 272-276.



- Farran, C., Wilken, C., Popovich, J. 1992 Clinical assessment of hope. *Issues in Mental Health Nursing*, 13, 129-138.
- Frankl, V. E. 1947 *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*. Wien, Verlag für Jugend und Volk. (霜山徳爾 (訳) 1961 夜と霧—ドイツ強制収容場の体験記録—みすず書房)
- Fehring, R. J., Miller, J. F., & Shaw, C. 1997 Spiritual well-being, religiosity, hope, depression, and other mood states in elderly people coping with cancer. *Oncology Nursing Forum*, 24, 663-671.
- Foote, A., Piazza, D., Holcombe, J., Paul, P., & Daffin, P. 1990 Hope, self-esteem, and social support in persons with multiple sclerosis. *Journal of Neuroscience Nursing*, 22, 155-159.
- Fromm, E. 1968 *The revolution of hope: Toward a humanized technology*. Harper & Rows, Publishers. (作田啓一・佐野哲郎 (訳) 1970 希望の革命 改訂版—技術の人間化をめざして— 紀伊國屋書店)
- Gaskins, S., & Forté, L. 1995 The meaning of hope: Implications for nursing practice and research. *Journal of Gerontological Nursing*, 21(3), 17-24.
- Godfrey, J. 1987 *A philosophy of human hope*. Kluwer Academic, Hingham. (Benzein, E., & Saveman, B. -E. 1998 One step towards the understanding of hope: A concept analysis. *International Journal of Nursing Studies*, 35, 322-329.より引用)
- Herth, K. 1989 The relationship between level of hope and level of coping response and the other variables in patients with cancer. *Oncology Nursing Forum*, 16, 67-72.
- Herth, K. 1990 Relationship of hope, coping styles, concurrent losses, and setting to grief resolution in the elderly widow(er). *Research in Nursing & Health*, 13, 109-117.
- Herth, K. 1991 Development and refinement of an instrument to measure hope. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal*, 5 (1), 39-51.
- Herth, K. 1992 Abbreviated instrument to measure hope: Development and psychometric evaluation. *Journal of Advanced Nursing*, 17, 1251-1259.
- Herth, K. 1993 Hope in older adults in community and institutional settings. *Issues in Mental Health Nursing*, 14, 139-156.
- Hinds, P.S., & Martin, J. 1988 Hopefulness and the self-sustaining process in adolescents with cancer. *Nursing Research*, 37, 336-340.
- Kastenbaum, R. 1987 Past versus future orientation in psychotherapy for the elderly. *Psychotherapy in Private Practice*, 5, 115-121.
- 勝俣暎史 1990 希望の心理学 教育と医学, 38, 309-314.
- 勝俣暎史 1992 心理臨床における希望と有能感 熊本大学教育学部心理学科臨床心理学研究室未公刊資料, 1-20. (勝俣暎史ホームページ<http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~katsu/hope.html>より引用)
- 北村晴朗 1983 希望の心理—自分を生かす— 金子書房

- 小泉美佐子・足高美香・大黒友紀子 1997 地域の健康な高齢者の希望の源とその意味を  
探る *The Kitakanto Medical Journal*, 47, 381.
- 小泉美佐子・足高美香・大黒友紀子 1998 高齢者の希望の源とその意味について 日本  
看護学会誌, 7(1), 25-32.
- Lange, S. 1978 Hope. In Carlsson, B., & Blackwell, B. (Eds.), *Behavioral concepts and  
nursing interventions*. J. B. Lippincott Company, Philadelphia, pp. 171-189.  
(Benzein & Saveman 1998より引用)
- Lehr, U. 1967 Attitudes towards the future in old age. *Human Development*, 10, 230-  
238.
- Lersch, Ph. 1970 *Aufbau der Person*. 11. Aufl. Johann Ambrosius Barth. (北村, 1983  
より引用)
- Lester, D. 1998 Helplessness, hopelessness, and happiness and suicidality.  
*Psychological Reports*, 82, 946.
- Lewin, K. 1942a Field theory and learning. *Yearbook of the National Society for the  
Study of education*, 41, part II, 215-242. (reprinted in 1997 *Resolving social con-  
flicts & field theory in social sciences*. American Psychological Association,  
Washington, DC.)
- Lewin, K. 1942b Time perspective and morale. Watson, G. (Ed) 1942 *Civilian morale*.  
Second year-book of the society for the psychological study of social issues.  
Houghton Mifflin, Boston. (reprinted in 1997 *Resolving social conflicts & field  
theory in social sciences*. American Psychological Association, Washington, DC.)
- Lynch, W.F. 1965 *Image of hope: Imagination as healer of the hopeless*. Baltimore, MD:  
Helicon.
- Macquarrie, J. 1978 *Christian hope*. A. R. Mowbray & Co Ltd., Oxford. (Benzein &  
Saveman 1998より引用)
- Maisonneuve, J. 1948 *Les Sentiments*. Presses Universitaires de France. (山田悠紀男  
(訳) 1955 感情 白水社)
- Marcel, G. 1962 *Homo viator: Introduction to a metaphysics of hope* (E. Crawford,  
Trans.). New York: Harper & Row.
- Menninger, K., & Pruyser, P. 1963 *The vital balance: The life process in mental health  
nad illness*. New York, Harper and Row. (Miller & Powers, 1988 より引用)
- Miller, J. F. 1989 Hope inspiring strategies of the critically ill. *Applied Nursing  
Research*, 2(1), 23-29.
- Miller, J.F., & Powers, M.J. 1988 Development of an instrument to measure hope.  
*Nursing Research*, 37, 6-10.
- Moltman, J. 1967 *The experiment hope*. London, Fortress.
- Nowotny, M. 1989 Assessment of hope in patients with cancer: Development of an  
instrument. *Oncology Nursing Forum*, 16, 57-61.
- Obayuwana, A., Collings, J., Carter, A., Rao, M., Mathura C., & Wilson, S. 1982  
Hope index scale: An instrument for objective assessment of hope. *Journal of*

- National Medical Nursing*, 74, 761-765.
- Onwuegbuize, A.J., & Daley, C. E. 1999 Relation of hope to self-perception. *Perceptual and motor skills*, 88, 535-540.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, 5, 1-10.
- Raleigh, E. 1980 *An investigation of hope as manifested in the physically ill adult*. Unpublished doctoral dissertation, Wayne State University, Detroit. (Miller, J. F. 1989より引用)
- Range, L. M., & Penson, S. R. 1994 Hope, hopelessness, and suicidality in college students. *Psychological Reports*, 75, 456-458.
- Snyder, C.R., Harris, C., Anderson, J.R., Holleran, S.A., Irving, L.M., Sigmon, S.T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. 1991 The will and the ways: Development and validation of an individual-differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 570-585.
- Snyder, C. R., Sympson, S. C., Ybasco, F. C., Borders, T. F., Babyak, M. A., & Higgins, R. L. 1996 Development and validation of the State Hope Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 321-335.
- Stephenson, C. 1991 The concept of hope revisited for nursing. *Journal of Advanced Nursing*, 16, 1456-1461.
- Stoner, M. H., & Keampfer, S. H. 1985 Recalled life expectancy information, phase of illness and hope in cancer patients. *Research in Nursing and Health*, 8, 269-274.
- Stotland, E. 1969 *The psychology of hope*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Zorn, C.R. 1997 Factors contributing to hope among noninstitutionalized elderly. *Applied Nursing Research*, 10 (2), 94-100.